『総合政策論叢』第９号（2005年３月）
島根県立大学　総合政策学会

顧頡剛先生と『二十四史』の校点事業について

包　遵信
陳　仲奇・邱　燕凌　訳注

包遵信近影、2004年８月22日自宅にて－陳仲奇撮影

『二十四史』と『清史稿』の校点（句読点をつけること－訳者）出版は、わが国の社会主義学術文化事業における一つの大きな出来事である。『二十四史』の中で最も早く出版された『史記』は、顧頡剛先生によって整理校点されたものである。また、顧先生は『二十四史』全体と『清史稿』の校点の総括責任者（原文は「総其成」－訳者）を担当した。この仕事は、周恩来総理が林彪と「四人組」の極左路線に対抗するためにとったある戦略的な決断と関連があり、また、周総理が如何に学術文化事業を重視していたかを示す一例としても挙げられる。

『二十四史』の整理出版は、毛沢東の指示によって1958年に始められたものである。1965年までに、『史記』、『漢書』、『後漢書』と『三国志』が出版される運びとなり、その他の整理作業も大部分或いは一部分が完成する段階に入っていた。ところが、文化大革命が開始されてから、この事業は完全に停止することになり、すでに出版された四史についても「四旧」[1)]のレッテルを貼られ、書店での販売や図書館での貸し出しさえも禁じられた。林彪と「四人組」が推し進めていた文化独裁主義に対抗し、1971年２月、これ以上本を出版しなければ、事態がいっそう深刻になってしまうので、文学書だけでなく、歴史書も出版しなければならないという指示を周総理が出した。当時、文化大革命前に出た書物の大半は印刷すべきではなく、たとえ一部の書物は印刷できるとしても、審査を経たうえで修正する必要があるという見解が出ていた。このような論調に対し、周総理は『資治通

鑑』も審査する必要があるのか、『二十四史』も修正する必要があるというのか、『紅楼夢』のような本も「四旧」の類に入るのか、と強く反論した[2)]。答えは言うまでもない。当時の情勢においては、できるだけ早くこれらの古籍を出版させることは、人々の知識や学問に飢えている状態を改善するだけではなく、林彪と「四人組」の文化独裁主義を打破することにもつながっていたのである。

しかし、出版界の人々は周総理の指示にまったく反応を示さず、逆に「四人組」のほうが、情報を聞いてすぐに動き始めた。2月下旬、上海から二人の関係者が上海市革委会写作組（即ち、羅思鼎[3)]）の紹介状を携えて、元国務院出版関係部門を訪ねて来た。彼らは上海方面では張春橋[4)]の指示を受け、すでに羅思鼎を中心とした『二十四史』の整理班を作ったことを伝えた。そして、中華書局がかつて校点をしたことがあると聞き、その関連資料及び整理校点済みの各史を借りて上海に持ち帰りたいと言ってきたのである。表面的には筋の通らないことではなさそうだが、実際は公に出来ない企みを隠していたのである。『二十四史』を整理しようとするならば、なぜもともと『二十四史』の出版を担当した中華書局に直接声がかけられないのか。もっと理解しがたいことは、中華書局側がこの仕事に加わりたいとはっきりとした意思表明をした際、上海からの二人の関係者が言葉をはぐらかし、過去に『二十四史』を出版したのが中華書局だという情報を知っていながら、「聞いたことがある」と言ってごまかしたことである。あたかも彼らは今までの事情を知らなかったような口ぶりであった。

もちろん、当事者の二人は上に命令されて動いただけで、やむを得ないのだが、実はこれらすべては、みな張春橋、姚文元[5)]の指図によるものなのであった。彼らの狙いは権力を借りて、他人の成果を横取りしようとするものであった。当時の国務院の出版関係者は真正面から対抗することはできないが、そのまま資料を渡すわけにもいかず、ついに、仕方なく一つの報告書をまとめ姚文元あてに出した。その報告書の主旨は次のとおりである。

> 上海のほうから張春橋、姚文元の指示で『二十四史』を整理するために、中華書局に関連資料を借り受けたいとの申し出があった。本来ならば、これに対して、全面的に支持しなければならないが、中華書局が『二十四史』の整理を担当したのは、毛主席の指示を受けたものであり、今後、それを継続するかどうかについて、われわれでは判断しかねる。そのため、今回の件は当方では決められず、ご指示をいただきたい。

この報告書を出した後、しばらく返事は来なかった。4月2日になって、姚文元は周総理へ一通の手紙を送った。『二十四史』は、前四史だけが出版されたが残った各史を続けて整理出版してはどうか、というような内容であった。少し考えれば、姚の真意は周恩来に指示を乞うものではないことがすぐに分る。彼は口では整理する必要があると提案するように言っているが、実際はすでに整理班を作っていたのである。（4月12日、周恩来が出版工作会議の出席者の一部と会見した席で、過去に『二十四史』を校点する仕事に関わった関係者の人数を聞いた際、上海の出版関係の軍代表は、上海では2月にすでに整理班を作ったと即座に答えた―包遵信原脚注）姚文元は、この手紙の中では、整理する仕事をどの部門に担当させるかという問題にわざと触れなかった。とにかく総理から「同意する」という指示さえもらえば、ことは彼らの思惑どおりに運び、すでにあった整理の成果

を全部手に入れることができる。これこそ姚の本来望むところであった。周総理は彼らの企みを見破ったかのように、その日のうちに次のような指示を出した。

『二十四史』のうち、すでに標点があるものを除き、『清史稿』を加えて、組織を作り、専門家に標点をつけさせることは、すべて中華書局に担当させる。また、顧頡剛先生を総括責任者とする。

周総理の指示は、姚文元にとってまるで棒で頭を打たれたようなものであった。一方、国の学術文化事業に関心を寄せていた数多くの知識人たちにとっては、大変な励ましとなった。4月5日、当時の国務院弁公室の責任者呉慶彤、元学部[6]留守組軍代表の張氏、出版関係者と中華書局関係者の数名が、一緒に乾面胡同にある顧先生の家[7]を訪ね、顧先生に周総理の指示を伝えた。顧先生は周総理の直筆の手紙を読んでたいへん感動した。当時の顧先生はわれわれの言葉で言うと、まだ「解脱」していない状況にあった[8]。しかし、先生は自分の置かれた環境や困難に一言も触れることなく、『二十四史』を如何に整理するかについて、自分の考えを多く話した。呉慶彤はその場で顧先生に、『二十四史』の整理についてご自分の考えを一つの提案書にまとめてほしいこと、生活面においても、何か困ったことがあれば、学部留守組と協力し解決してもらうようにするので申し出てほしいことを伝えた。

顧先生は、周総理の指示を聞いた後、一週間あまりの時間をかけて、「国史整理計画書」を書き上げた[9]。その中で、自分の構想を四つの部分に分けて詳しく述べた。すなわち「整理の範囲」（原題は、「整理すべき書籍」）、「整理の刷新」（原題は、「刷新すべき局面」）、「印刷の様式」及び「作業の進め方」である。

整理範囲に関して、顧先生は、過去の『二十四史』が封建時代における「正統」もしくは「偏統」の先入観に影響されたため、「中央政府」のものを正統と見なし、地方を占領した政権のものを「偏統」と決め付けていた。『二十四史』は過去において、「正史」と見なされてきたが、実際にはその中に必ずしも全中国の歴史が含まれているわけではないと述べている。そこで、顧先生は「偏統」政権下の歴史書も一緒に整理し編入すべきことを提案し、計画書の中に四つの歴史書を挙げた。すなわち、清の謝啓昆の『西魏書』（『魏書』の後に置く）、呉任臣の『十国春秋』（『新五代史』の後に置く）、呉広成の『西夏書事』（『遼史』の後に置く）、近人の銭海岳の『南明書』（『明史』の後に置く）である。顧先生はその中の『南明書』について、特にこれは銭先生が数十年の精力を費やして完成させた百数十巻にものぼる専門書であって、一代の文献に十分値するものだが、銭先生がすでに故人となり、世間にはこの稿本の存在を知る人も少ないため、早急に稿本の所在を確かめるべきであると述べている。また、数部史書を増やした後は、『二十四史』或いは『二十五史』と呼べなくなるため、全体として『国史彙編』という名称にすることをあらかじめ提案した。

『史記』に関しては、顧先生は、宋以後の各種の校勘注釈に対して、粗雑なものを捨て精髄を残し、新たな注釈を作る意見を出した。『三国志』には表、志がないため、清の学者の補作を編入すべきである。柯劭忞の『新元史』は、清代の学者が西北の歴史を研究した成果を網羅している。その中には、西アジアや東ヨーロッパに保存された蒙古に関する

資料も取り入れている。しかし、柯氏は外国語が読めなかったために、外国語の資料を間違って引用したことは避けられないであろう。この事情を考慮し、屠寄の『蒙兀児史記』と照合しながら校正し、その当否を決めて、『元史』の不足部分や間違った部分を補うべきである。このように一連の提案を行った。

『清史稿』は清朝の学者の手によって仕上げられたため、清王朝に対してお世辞の言葉を惜しまずに使い、一方、太平天国と同盟会に対しては、「賊」や「盗」だと誹謗していた。顧先生はもしこれを印刷するとしたら、必ず修正しなければならないとし、次の六つの理由を挙げた。

(1)アヘン戦争後、わが国は半植民地に転落し、帝国主義の圧迫と略奪を被っていた。しかし、『清史稿』は、ただ太平盛世を粉飾するばかりで、わが国が植民地に転落した国辱を覆い隠した。読者に中国の近代史に対して、正しい認識を持たせるために、われわれは歴史事実を正面から認め、あらためて書き直さなければならない。

(2)慈禧、奕劻、李蓮英らの罪深い行為を事実どおりに記述しなければならない。

(3)太平天国新政を詳しく記述すべきである。現在の『清史稿』には、ただ洪秀全一人の伝記が載っているだけである。これは明らかに妥当ではない。

(4)清の呉寄荃が整理した『清代蒙回蔵典彙』（原稿本）を参考にすべきである。

(5)孟森の『明元清系通紀』（原稿本）を参考にすべきである。

(6)清人の掌故筆記を参考にすべきである。これらの書稿資料はみな『清史稿』を修正するための参考になるものである。

まだ出版されていない各史には、紀、伝を除いて、形式が決して統一されていない。表や志のあるものとないものがある。宋代以後、補作を作る人が多く、一つの志に数人の作者が関わっているものもあるほどである。顧先生はこれらの補表や補志に関して、その中の一人を選んで採用するか、もしくは数人の説を総合整理して関連各史に編入することを提案した。さらに、前人が手をつけていないところは、校点者に補作を作らせることも提案した。

整理作業を如何に刷新させるかに関して、顧先生は以下の五つの意見を示した。

(1)歴史地図を続いて作成し、それぞれの各史に編入する。もし、ある王朝の時代に国の領域が拡大する時期と縮小する時期があれば、それに合わせて複数の地図を作成し、西暦の年代で明記する。それによって、地理と時代を対応させる役割を果たすように配慮する。

(2)車や服飾、道具、機械、器具の絵を編集作画し、各史の相応の巻次に編入する。

(3)重要な歴史事件を『大事表』に編纂し、各史の後ろに付ける。

(4)読者が要点を掴みやすいように、各段落に新たに標題をつける。

(5)人名、地名、官名、書名、器物名、方言、術語などの索引を編成する。

その他、植字や組版をする場合の様式と作業方法について、顧先生は、かなり詳しい提案を考えていた。4月29日、国務院の第一招待所において、この事業に関する座談会が開かれ、顧先生をはじめ、白寿彝、王冶秋、高亨、史樹青、許大齢ら二十数人が出席した。その会議の席上、彼らは顧先生の一連の提案内容は、すぐさま実行することが難しいので、とりあえずこれまでの『二十四史』の方法に沿って各史を出版させること、その他の重要典籍、例えば顧先生が挙げた幾つかの史書については、『二十四史』の整理出版が終って

から取り組むことにすべきであるという結論がまとめられた。さらに、歴史地図に関しては、別扱いとして中央に報告書を出し、歴史地図の編集・作製を開始するように提案することで、認識が一致した。

5月中旬、周総理が『二十四史』の整理出版に関する報告書を自ら詳しく読み直し、毛主席に提出し、「許可」の指示をもらった。このような経緯で、『二十四史』の整理事業がようやく再開することとなった。顧先生は高齢であり、体調がすぐれないので、具体的な作業にはあまり関われなかった。しかし、先生が「総括責任者」となったことは、当時としてはかなり重要な意義を持っていた。それは周総理の文化学術事業に対する関心の高さを表わしているだけでなく、旧社会に活躍してきた先輩知識人も含め、知識人や学者に対する総理の信頼と関心も表わしている。このことは、当時のような歴史的環境の中に身を置いていた者でなければ、その真の意義をとても理解することは出来ないであろう。なぜならば、当時、知識人はいわゆる「臭老九」[10]というレッテルを貼られ、そのうえ、農村にある幹校[11]に下放され再教育を受けることになっていた。顧頡剛先生のような年配の学者であっても、たとえ国内外で名を知られていても、冷遇されただ平淡な日々を送ることしかできなかったのである。そのような境遇の中、突然周総理の指示により、顧先生が『二十四史』の整理の「総責任者」になったということは、知識人の目から見ると自分たちはやはり役に立つ存在であり、党の知識人政策がまだ機能していることが理解できたのである。6月上旬、周総理は顧頡剛先生と会見した際、詳しく顧先生の健康状況を尋ね、また、先生が昔北京大学で教鞭を執っていた頃のことについても言及した。北京大学で勉強したことがある人でもはっきり分らないことなのだが、周総理はたいへん詳しかった。席上、沈尹黙[12]先生について話が及び、総理が彼の目はどうなっているかなどを尋ねた。総理は『史記』をはじめ、『二十四史』に標点をつけるだけでなく、『春秋左伝』をはじめ、『十三経』全体もみな標点をつけるべきだと主張した。また、総理は、『二十四史』の話から中国の歴史伝統へと、祖国の古代文明のことからエジプトをはじめとする世界の古代文化の話へと、如何に古人を評価すべきかという話題から近代史における何人もの著名人のことへと、その幅広い知識と鋭い見解をもって論説を展開した。その懇切な言葉使いを目の前で聞き、在席の人々は、偉大な革命家の度量の広さを感じた。今日、周総理が亡くなってはや七年の歳月がたち、顧先生も亡くなって三年になる。しかし、周総理からの指示を受けて進め、顧先生が「総括責任者」を担当した『二十四史』校点事業は、学術史上における一つの記念碑であると言えるであろう。

訳注者付記

包遵信のこの原稿は、陳仲奇が2003年8月北京で現地調査した時、王煦華より入手したものである。原文は王煦華が清書したもので、全部で原稿用紙10枚、題名は「顧頡剛先生是怎麼担任『二十四史校点』総其成的」とある。王煦華によると、包遵信は1971年に中華書局の代表として、国務院弁公室の呉慶彤とともに、顧頡剛の自宅を訪ね、周恩来直筆の指示を見せた当事者の一人であった。この文章は、1986年に王煦華が『顧頡剛先生学行録』を編纂する際、彼に執筆を依頼したものであったが、『顧頡剛先生学行録』は諸般の事情より最終的に出版することができなかった。包遵信は1989年の天安門事件に関わったため、同年7月7日に当局に逮捕・投獄されたが、1993年1月に釈放された。現在は無職

であるが、元の勤務先である中国社会科学院歴史研究所から毎月400元の生活費を支給されている[13)]。

なお、訳文の中に用いられた括弧内注について、特に「訳者」と明示しないものは、すべて作者原注である。

注

1）「破四旧、立四新」は、文革初期のスローガンの一つである。1966年６月１日、『人民日報』は「すべての牛鬼蛇神を一掃せよ」という社説を掲げた。この社説は、林彪の「五・一八講話」（中央政治局拡大会議における講話で、毛沢東の同意を得て、９月22日付で党中央よりマルクス・レーニン主義の重要文献として党内に配布）に基づいて書き上げられたものである。この社説では、いわゆる「四旧」とは「旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」を指し、「四新」とは「新思想、新文化、新風俗、新習慣」を指すとした。同年８月18日に、林彪はある群衆大会で、再度「大破四旧、大立四新」を呼びかけた。林彪が唱えた「四新」の中身は極左的色彩を濃厚に帯びているため、中国の伝統古籍、文化財、社会の道徳などが空前の打撃を受けることとなった。

2）1971年１月22日、出版関係の責任者たちが、周恩来総理に1971年度出版計画を提出した。その主旨は『毛沢東選集』第五巻の出版準備を整えると同時に、マルクス主義の経典著作や中央文件及び「革命様板戯」を続けて出版するなどである。２月11日、周恩来が出版関係責任者を招き、重要な指示を出した。周総理は「あなたたちの計画を見せてもらったが簡単すぎる。計画中の本はもちろんだが、しかし、その数種類だけではまだ足りない。青少年には読む本がない。……新書を出す。旧書も良いものを選んで出してもよいのではないか。1971年には、これ以上本を出さないと事態がいっそう深刻になってしまう」と述べた。４月12日、周恩来は全国出版工作座談会責任者のメンバーと会見し、さらに「現在、書店には中国と外国の歴史書がない。歴史、地理の本を出さないことは大きな欠点である。……一部の旧書を選んで青少年に与え、彼らに批判的に読ませ、歴史が如何に発展してきたかを知ってもらう。」と指示した。また、当時流行っていた「文化工作危険論」を批判した。詳しくは宋原放主編『中国出版史料・現代部分』第三巻下冊（山東教育出版社　2001年４月第一版）479頁を参照。

3）羅思鼎は、1963年に設立された「中国共産党上海市委員会写作組」で用いられたペンネーム。文革中、「四人組」が宣伝活動に利用した。このペンネームは、文化大革命前の中国人民解放軍の英雄である雷鋒の名言「永遠に錆びない螺糸釘（ネジ）のように」の「螺糸釘」と類似した発音であることからつけられた。張春橋や姚文元らの指示を直接に受け、このペンネームで発表した政治論文「資産階級と儒法論争」など数十篇ある。

4）張春橋（1917年～）は、山東省巨野の人。元は中国共産党上海市委員会書記処書記（責任者）であったが、文化大革命期間中、中央文革小組のメンバーや国務院副総理などの要職を歴任した。彼は江青、姚文元、王洪文と「四人組」を結成し、反革命的世論を打ち出し、多くの国家指導者を陥れ、武装反乱を計画したとされる。1974年、毛沢東に周恩来、鄧小平を誣告し、国家権力を奪い取る画策をした。1981年、「反革命宣伝罪」、「政府を転覆罪」、「武装反乱罪」などの罪で、最高人民法院特別法廷により、死刑、猶予二年、政治権利終生剥奪の判決を受けたが、1983年に無期懲役になった。

5）姚文元（1931年～）は、浙江省諸暨の人。元は上海『解放』雑誌の編集者であったが、文革中、中央文革小組のメンバー、中国共産党第九、十届中央政治局委員となり、林彪、江青らと

組んで、反革命集団を結成した。1965年11月10日、当時、上海解放日報社の編集委員であった彼は、江青の直接の指示を受けて『文匯報』に「新編歴史劇『海瑞の免官』を評す」を発表。この文章は、その後、全国の新聞に転載され、史学界、文芸界、哲学界など社会科学の主要な領域に幅広く波及し、文化大革命の導火線となった。1974年から1976年の間、彼は「梁効」(北京・清華大学)、「羅思鼎」(上海市党委員会)、「唐暁文」(中央党校) などの御用執筆グループを指揮し、大量の政治論文を発表した。1981年、最高人民法院特別法廷により、「反革命罪」、「反革命宣伝煽動罪」などの罪名で、懲役二十年、政治権利剥奪五年の判決を受けた。

6)「学部」とは、中国科学院哲学社会科学学部の略称。1955年6月1日、政務院(後国務院に改名)の許可を得て、中国科学院が物理学部、数学学部、化学学部及び哲学社会科学学部を設立した。1977年5月に、中国科学院哲学社会科学学部を基礎にして、中国社会科学院が設立された。初代院長は胡喬木。現院長は李鉄映。現在、中国社会科学院には研究所31、研究センター45、二,三級の学科約300(そのうち、重点学科120)がある。全職員数は4200名、第一線で科学研究に携っている研究者の数は3200名、そのうち高級専門家は1676名、中級専門家は1200名。中国における社会科学の最高学術機構である。

7)乾面胡同64号の四合院が、顧頡剛の北京での住居であった。娘の顧潮の編著である『顧頡剛年譜』によると、1954年8月20日、顧頡剛は上海を離れ、22日北京に移った。彼の大量の蔵書を収納するため、中国科学院は特別にこの大きな四合院を手配した。顧頡剛は日記の中で、このことについて感激の気持ちを次のように記している。「私は生涯本が好きで、衣食費を節約したお金で本を買い求め、こんなにたくさんたまった。科学院は私のために、全部北京まで運送し(顧潮の話によると、顧頡剛が上京した際、持参した書籍の数量はちょうど列車二両分あったという—訳者)、そのうえ、広い住まいを用意してくれた。政府の手厚い配慮を心から感謝する。」顧頡剛は1980年12月25日に亡くなるまでこの家に住んでいた。現在、彼の弟子の王煦華が、遺稿を整理するため、その一部を使用している。

8)「解脱」とは、反動学術権威のレッテルがはずされることである。顧頡剛の日記によると、周恩来の提案により(毛沢東の許可を得たことは勿論である)、彼は『二十五史』を校点する仕事の総括責任者になった。この時「反動学術権威」のレッテルがはずされ、仕事に復帰する権利が得られたのである(日記には、「由“反動学術権威”大帽解脱」とある)。因みに、1966年の「五・一六通知」は、いわゆる「学術権威」の資産階級的、反動的な立場を暴露せよと呼びかけ、同年8月に中央の文件として発表された「十六条」の中にも「資産階級反動学術権威を批判することは、文化大革命の目的の一つである」と明記されている。

9)1971年4月7日、周恩来の指示を受けた顧頡剛は、早速「国史整理計画書」の執筆に着手した。16日に書き上げ、29日に国務院第一招待所で開かれた『二十四史』及び『清史稿』の校点整理に関する座談会に提出した。この「国史整理計画書」は、国内でまだ正式に公表されていない。

10)「臭老九」は、文革期間中に用いられた知識人に対する蔑称。すなわち知識人を地主、富農、反革命分子、壊分子(悪党)、右派、裏切り者、スパイ、走資派(資本主義の道を歩む権力者)に続き、第九番目の反体制勢力とした。そこから、「臭老九」という言葉が生まれた。

11)「幹校」は、文革期間中、極左路線の指導の下で、毛沢東の「五・七指示」の精神を徹底的に実行するために、幹部を集中下放し、労働改造させた場所である。1968年、黒龍江省革命委員会が、慶安県柳河に農場を作り、毛沢東の「五・七指示」発表二周年を記念して「五七幹校」と命名した。10月5日の『人民日報』には、毛沢東の「幹部が下放労働するのは、新たな教育を受ける機会である」という指示が発表され、以来、中央から地方まで数多くの幹部や科学技

術者たちが、幹校でかなり苦しい肉体労働を強いられた。結局、幹校は、林彪と江青らが幹部に対して政治的迫害を加える場となった。1979年 2 月17日、国務院の「五七幹校停止に関する事項の通知」が公表され、「五七幹校」が徐々に撤廃されることになった。

12）沈尹黙（1883～1971年）は、書道家、詩人。元の名前は君黙。字は中。号は秋明、瓠瓜。浙江省呉興（今湖洲）の人。青年期、二度に亘り日本に留学したことがある。帰国後、北京大学、北京女子師範大学で教鞭を執る。蔡元培、李石曽の推薦により、河北教育庁庁長、北平大学学長を歴任した。解放後、周恩来総理により中央文史舘副舘長に任命され、新中国成立後、初の書道組織である上海市中国書道篆刻研究会を創設した。彼は、民国初期の書道界において「南沈北于（右任）」と言われていたように、すでに中国の書道界の泰斗であった。行書を特に得意とする。「五・四運動」の時、陳独秀、魯迅らとともに、新文化運動の代表的な雑誌『新青年』の編集者の一人となり、白話詩を発表。旧体詩にも造詣が深い。主な著書には『歴代名家学書経験談輯要釈義―上』、『二王法書管窺』などがある。そのほか、『沈尹黙書法集』が1981年に出版され、彼の二十歳以後各時期の代表作を収録している。

13）包遵信本人の経歴及びこの文章の作成経緯については、陳仲奇「『二十五史』校点整理事業をめぐる周恩来と姚文元の確執について」島根県立大学『北東アジア研究』第 8 号、近刊を参照。

（BAO Zunxin / CHEN Zhongqi and QUI Yanling）